

2023年3月2日 千葉大学アカデミック・リンク・センター  
第5回 ALPS セミナー

参加者アンケート（オンライン：Zoom）

当日参加者数： 189名 アンケート提出数： 49件

-----  
本セミナーについて、参加者の皆様から寄せられたご意見・ご感想を以下に掲載いたします。なお、原則原文のまま掲載しておりますが、個人名・組織名が特定できないよう事務局で若干の調整をおこなっておりますことをご了承ください。

1. 本日のセミナーで、よくわかったこと、新しい発見などがあればお書きください。

- あまりなかった
- 大学、大学図書館のこれからについて、考えさせられました。
- 高等教育、大学の課題
- 大学は、未来では絶滅危惧種に相当する存在であること。
- 教育におけるDXの有り様、可能性
- 他大学の現状がよくわかりました。
- 同じように考えているリタイア間際の学者がちゃんといてくれるのは自分のこれからの励みになります。たとえ悲観的な未来を想定してはいつつも…
- 将来の大学の在り方、研究者の存在
- 学修支援の在り方。
- DX どうこうというよりも根本的な、大学（高等教育）とはなんであるかということなのかと感じました。
- 先生の説明されたスライドで「電子ジャーナルは“DX”した」と始まるページが印象に残りました。とても整理されていて、なるほど そうだなあと思う部分と、なんだかSF小説のようだと感じる部分が面白かったです。（昭和の人間にとっては、21世紀に入って様々なことがSF小説のように感じられています）
- 今までの歴史的な経緯がよくわかりました
- DX時代となり、大学の在り方が大きく変わるであろうことが再認識できた。
- 大学の将来について考えることができました（できました）。
- 講師の話について途中から聞いたため前提が無かったためか、結局、大学にとってDXはどうか結論に至るまでの理由・因果関係がわからなかった。
- 奇しくもコロナ禍で予見、顕在化された「土屋先生流」大学不要論
- 図書館で調べる人は今はいないということには昭和生まれとしては衝撃でした。
- 電子ジャーナルがDX化したことにより図書館の存在意義が薄れていくことと同様に、大学もDX化に伴い、その存在意義が薄れていくことを現実のこととして考えさせられました。
- 昔からわかっていた気もしますが、土屋先生がこれまでやられてきたことは、オブジェクト指向システムのように、どこかそれぞれが独立していて、それぞれの関係性も低いように感じるのに、オブジェクトはインターネットワーキングのように、どこかでつながっていて、何かを考えると、どこかの入口からでもアクセス可能になっている、ということを実感したかもしれません。
- 大学や研究にとってコロナ禍は自分が思っている以上に大きな影響を与えたと思われること。コロナ禍が終息しつつある(?)中で、それはきちんと検証される必要があるのではないのでしょうか。
- SARTRASにかかる矛盾や、留保金額の凄さ。(≡令和3年度改正に対する懸念。)

- 完全な成果主義になった時には、大学は「労働市場にむけて準備させるための仕組」になってしまう、絶望的な未来、との事でしたので少々暗澹たる気持ちになったのですが、「知はそこまで脆弱なものではない」「多様性を維持」「哲学の需要は高まる」等のポジティブな発言を質疑応答でいただき、ポジティブな気持ちになりました。
- コロナ禍時に対応してきたことが、今後の大学の在り方に大きな変化を与えていることが、よくわかった。
- 大学がなくなる、図書館がなくなるというショッキングな内容が頭に残っています。
- 「大学工場モデル」という表現はとともわかりやすいです。ふりかえてみれば大学における情報化・電算化はめざましく、アカデミック・リンク・センターができたころは教材開発のための部屋は本当に必要となるのかイメージがわきませんでした。コロナ禍で授業オンライン化になり、教材開発が必要になったことは今でも驚きです。
- 図書館のデジタル化の歴史を振り返ることができました。
- やはり図書館はこのままでは絶望的な状態にあること。
- 振り返りがあったことで、学術雑誌総合目録作業を思い出しました。Digitization だったんですね。
- DX 後の大学の環境の複雑さ
- 大学の研究環境が既に DX 化しているのがよくわかった。(ただし電子ジャーナル化は大手寡占学術出版社(エルゼビア・シュプリンガー・ワイリー)が新たなビジネスモデル(ペーパービューではなくパッケージ)として構築したもので、オープンアクセス化に際しても転換契約というビジネスモデルを作った。いずれも顧客は研究者ではなく大学なので、出版社は当然大学から利潤を得ようとしていると思われる)
- 人文系の研究者のおかれる環境が、日本はまだ守られているほうなのだということに驚きました。

## 2. 本日のセミナーで、よくわからなかったこと、疑問に残ったことがあればお書きください。

- 絶滅危惧種の未来について。
- 求められる学修成果の表現
- 理想と現実のギャップをどう埋めるか。
- 日本の家庭における 教育費の金額がわからない、というくだりがありました。たぶん、相当な金額だと思うのです。いったい日本の教育は、親や支援金などなどの費用に対して、見合ったものなのでしょうかねえと、ふと疑問に思いました。 セミナーの本筋から離れてしまいましたが。
- 特にありません
- 実利的なものの考え方が優勢となる中、人文系の学問はどのように維持していく(すべき)ものなのか。
- 高等教育(大学)という制度、仕組み(段階)をなくした時、(わが国として)不都合はあるかどうか。
- 大学にとって DX により悲観的な結末を迎えることになるだろうとのことでしたが、何がどうなることによって、今の大学が悲慘な結末を迎えるのか? 危機感はあるものの、理由がよくわからなかった。
- 学修資源のこと
- 教室、教壇、教師は必要でなくなるのか? コロナがもたらした産物だが影響はすぐではなく、その当時の学生たちが社会を担う年代になったときにわかるかもしれないのではないかと思います。
- 研究者の育成の機会が失われていくのがなぜなのかが、良く理解できませんでした。
- 竹内先生の、最後のご発言「時空を超えて学習資源を保存するとともに、使えるようにする」についてもう少しお話を伺いたかったです。
- 15 回くらいのオーラルビデオが必要かと思います。リアルタイムでは体力的に難しいと思うのでやはりオンデマンドのOCW とか MOOC とかにしないといけないのではないのでしょうか。
- 場としての大学が不要なものとなった(と受け止めました)との考えには賛成できません。
- 研究者に要求されるスキルは高くなるのではないかと、研究者のトレーニングの仕組みは必要になるだろう、とのことでしたが、具体的にどのように仕組みを作っていくのか、その展望について御教示いただきたく思

いました。

- 本当に対面は必要なくなるのか。リアルの重要性は、なくなるのか疑問です。
- 大学の機能自体が本当になくなるのか、疑問に思いました。
- SARTRAS に補償金を支払ってオンライン教材をたくさんつくっても、その教材は当該大学の授業にしか使えないと思いますので、誰もが自由に使える OER が増える、というわけでもないと思います。確かに教科書はいらなくなりましたが。
- 今後の大学の学習資源・環境の変化についてももう少し聞きたかった。(コロナ禍で一斉に行われたオンライン授業を、再検討・再利用可能なアーカイブにできた大学があったとしたら、その大学の教育・学習資源として大きなものになったと思われるのだが)

**3. 大学における教育・学修支援の在り方についてのお考え、教育・学修支援のために必要と思う資質・能力、また、教育・学修支援のご所属先での取組事例やご存知の特徴ある事例などがあればお書きください。**

- 全学共通ポートフォリオとルーブリックの運用
- 知財にも財力的に制限があることから、小規模同士の大学が手を組んでバーチャル図書館などで知財を共有できれば良いだろうと思います。そのためには IT に熟知した人材が一層必要になってくるのではないのでしょうか。
- コロナ後を見据え、コロナ禍におけるこれまでの知見をどのように進めて行き、新たな教育・学修支援に対する可能性が見つけられるか、模索しているところです。
- 今回の講演会とつながるような取り組みを特に思いつきません。
- とくにありません。
- ライセンス取得に向けた大学・学部では、国試対策に傾倒するあまり、大学院研究の比重が少なく、研究者の育成に困難を来す恐れがある。大学院教育・研究に配慮した取組みが必要である。
- 「これまでに教育現場で作成されてきた教材は使われ続けるというよりはむしろ、新たな教育のための資源となる」ことについては、確かにそうであると思いました。私も一大学教員として多様な教材を作ってきましたが、それらは、今後の教育のための資源であるという認識を持ちたいと思います。
- 私の大学は小さい大学なので、学長が変わった途端に、一か月くらいの一部の人たちの議論で DX 推進センターなるものを作ってしまった。DX の推進には「優しい独裁者 : Benevolent Dictator For Life」が必要なかもしれません。
- 教育・学習支援の在り方というよりも、いったい大学はどのような人材を育てることを求められているのか(求められていないのか)わからなくなってきました。それによっても、在り方が変わるように思います。
- この先どのようなことが起きるのかを想定しながら学修支援を進め、常にスキルアップをし、不測の事態が生じても対処できる能力が必要だと思えます。危機的な状態に遭遇しても転機としてとらえることができる能力も必要ですね。

**4. オンラインセミナーを受けてみて、ご不便に感じたこと、改善してほしいことがありましたら、ご自由に記入してください。**

- Zoom の仕様なのか不明ですが、スライドの文字がぼやけていて大変見にくかったです。(今回特に文字が小さく潰れて読めませんでした)
- 特にありません ありがとうございます
- 時間がオーバーしていたこと。
- もうちょっと住みやすいスライドであればさらに良かったと思います。
- 今日は海外からの参加でしたが、日本にいるのと変わりなく参加できました。技術の進歩は凄いものがあり

ます。

- 画素があまり良くなく、文字が見えにくかったです。
- 特になし
- 特になし。
- いつも面白い講座をきかせていただいているのですが、今回の講座はわかりづらいものでした。
- ブラウザにもよるが、スライドの画面が少し小さいように感じられた。
- オンラインの不便さは特にございません。
- 職場で利用しているシステムとは異なるようで、受講者のカメラやマイクの設定がよくわかりませんでした。ご迷惑をおかけしてしまうのではないかと、心配になりました。
- 特にありません。
- スライドの文字が不鮮明で読みづらかった
- 資料の文字が小さく見づらかったことが残念です。
- 画像・音声とも良好でした。
- 画質が荒く資料が読みづらかったです
- オンラインセミナーだからこそ参加できました。

#### 5. 本日の内容について等、その他、自由にご意見をお書きください。

- FDになるかと思いましたが教育においても実験やラボが必要な領域のため、正直なところ期待した内容ではありませんでした。
- 改めて電子化、大学の意義(?)について考えるきっかけになりそうです。貴重なセミナーに参加できました。ありがとうございました。
- ご講演ありがとうございました。興味深く聞かせていただきました。
- 土屋先生の千葉大学最終講義のようでした。
- これまでもやっと感じていたことが、ハッキリお話として聞かせていただいてあらためて認識した感じがします。これからの進み方の参考にさせていただきます。貴重なご講演をいただきありがとうございました。
- 教育においてDXが進むことによって、大学で行われている教育内容やプロセスが可視化され、学習者・履修者自身が「何を身に着けたか」を主体的に把握できることは望ましいことではないかと思えます。せっかくそのようにして「学習者」の「主体性」が見いだされるチャンスでもあるようなのにやはり労働市場、企業の側は従来と変わらないラベリングを買い手として行い続けるのでしょうか。（ロマンチストに過ぎるとしても）企業の求人におけるDXはどのようなものが考えられ、それは企業の要請を受ける「大学工場」にどう影響を与えるのでしょうか。そして竹内先生との最後のお話で、資源を固定化されるものにとらえずに流動的に生み出されるものだとするご意見に大変賛同しますが、そもそもその流動的なものをどのように「評価」するかという点において、やはり試行錯誤あるいは評価しきれないということになっているのでは、それがイギリスの評価根拠としての学生アンケートや履修率（ある意味開き直り）になっているのではという気がします。個人的には最終的に企業側が消滅する理論になれば面白いのですが、常に流れを握るのがお金を持つもの、という構図自体を転換するというようなことは教育において起きないのでしょうか。土屋先生と竹内先生との対談で4時間くらいやっていただきたいです。
- 自分には難易度の高い内容だと承知していたのですが、ところどころ理解できる部分や、調べてみようという興味を抱いた部分があり、とても有意義でした。ありがとうございました。

